

71. 現存古写経の書写と伝来－静嘉堂古写経群を中心に

群馬県立女子大学 講師 浦木 賢治

概要

本研究では、(公財)静嘉堂(静嘉堂文庫美術館、静嘉堂文庫)が所蔵する古写経群(以下「静嘉堂所蔵古写経群」)の調査成果をふまえ、他機関所蔵の関連する古写経の実物調査を実施し、「接続」や「僚巻」関係を考察、また類例との比較において各経巻の位置づけを明らかにすること、またそれら古写経群の伝来の過程を探り、その歴史的価値を再検討することを目的としました。資料調査は協同研究者全員で行うことを基本とし、京都国立博物館や奈良国立博物館、東大寺図書館、大和文華館、斯道文庫など9ヶ所を訪問し、静嘉堂所蔵古写経と関係すると思しき写経を中心に約100件の実物調査(経巻全体の撮影、法量の計測、入念な観察など)を行いました。

このたびの古写経調査では、調査対象の経文を比較することで「接続」「僚巻」関係等の仮説を立て、実物調査によって経巻の仕様、紙質、虫損などの損傷具合等を観察することで、「接続」等の可能性について詳しい検討を行いました。その結果、例えば、静嘉堂文庫美術館蔵「宝網経」と京都国立博物館蔵「仏説宝網経」がかつて一紙であったものが切断されて分かれてしまっていることが確認でき、奈良国立博物館蔵「妙法蓮華経 巻第四残巻」と静嘉堂文庫美術館蔵「妙法蓮華経 巻第四」がかつては貼り継がれていた「接続」関係にあったことなどを明らかにすることができました。今後も同様の古写経の経文比較、「接続」関係の検討を継続するとともに、形式変化の痕跡を古写経実物に確認しつつ、併せて古写経の伝来・来歴について詳細に考察していきたいと思います。

今回の古写経研究は調査対象が多く、複数名で効率よく調査を行う必要があり、貴財団の研究助成により遠隔地で複数名での調査が可能となりました。所属の異なるメンバーによる本研究において貴財団の助成金は利便性が高く、速やかに予算執行することができました。このような貴重な機会を賜りましたこと、改めて御礼申し上げます。

背景および目的

2021年度、東京大学史料編纂所の一般共同研究「静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化」により、静嘉堂所蔵古写経群の悉皆調査にもとづく基本情報収集、デジタル撮影、紙質調査が行われました。これにより、そのコレクションの全体像がはじめて明らかになったとともに、もとは同一巻または1セット(当初の僚巻)の写経群として制作された古写経が他機関に所蔵されていることが課題として浮かび上がりました。

これまで古代中世の古写経を所蔵する博物館・美術館では、古写経の一部分を展示公開しても、その全容を展示する設備・機会に乏しく、展覧会で全体が公開されることはほとんどありませんでした。また近年では公立館を中心に、インターネットによる所蔵品の画像公開が充実し、古写経の経文比較研究を後押しする状況にありますが、まだ十分とはいえません。このような公開状況が、経巻・経文全体を考察対象とする古代史研究者の足枷となっていた面が否めず、また古代史と美術史の研究者の人的ネットワークに接点が乏しかったことも、古写経研究を停滞させていた一因と考えられます。

また、古写経の「接続」「僚巻」関係等を検討するには、写経各部の法量や経文の筆跡、紙質やその損傷具合を詳細に確認する必要があります。そこで、本研究では関連する他機関所蔵の古写経の実物調査を実施し、「接続」や「僚巻」関係を確定することを目的としました。また類例との比較から各経巻の位置づけを明らかにしつつ、経巻に伴う付属品等の検討から、その伝来の過程を明らかにし、その歴史的価値を再検討することも目的としました。

方法およびこれまでの成果の概要

本研究では、古写経をめぐる上記の社会背景・研究目的を鑑み、古代史研究者と美術史研究者の協働で調査研究を実施することとしました。この試みはこれまでの古写経研究と大きく異なる点です。古代史を専門とする東京大学史料編纂所・教授山口英男氏（役職は申請時）、同所・准教授稲田奈津子氏、同所・学術専門職員市川理恵氏と美術史を専門とする静嘉堂文庫美術館・学芸員吉田恵理氏、群馬県立女子大学・専任講師浦木賢治による学際的な研究グループで調査研究を行いました。この研究組織により、古代史研究者による経文や正倉院文書などに関する知見と美術史研究者の人的ネットワークをベースとした実物調査のための折衝と遂行、古写経の詳細な観察と評価などが可能となりました。

本研究における古写経調査は実見による実物調査を基本とし、概ね以下の方法で調査研究を行いました。

- ①古写経全体の調査とメモ写真撮影。
- ②調査対象の経文を SAT 大正新脩大藏経テキストデータベースと突合。
- ③調査対象の仕様等の確認と「接続」「僚巻」関係等の考察。
- ④古写経の伝来を示す付属資料の確認。

調査では、まず古写経の基本情報、メモ写真を収集し、「SAT 大正新脩大藏経テキストデータベース」（以下、「大藏経 DB」）を活用し、古写経の経文の現状を確認しました。古写経は、一見、本紙が欠損していないように見えても、本文を確認すると数紙分本紙が失われていることもあります。また、近い仕様の古写経 2 件の本文を比較することで、もとは直接つながっていた「接続」関係にあるか（もとは一枚の本紙であったか、もしくは貼り継がれて連続する二紙であったか）、同一巻の離れた所に位置した本紙であったか（「同一巻」関係）、一連の古写経ではあるが別巻なのか（「僚巻」関係）を判断することができます。経文の語句から「接続」関係等の仮説を立て、写経の仕様、紙質、損傷状況を詳細に確認することで仮説を検証し、仮説が正しければその論拠を積み重ねることができます。

このたびの調査によって、静嘉堂所蔵古写経群と「接続」関係にある經典などを明らかにすることができました。以下に主要なものを記します。

まず上記でも述べました通り、京都国立博物館蔵「仏説宝網経」と静嘉堂蔵「宝網経」は、後者第二紙の直後に前者第一紙がほぼ欠失なく「接続」し、もとは一紙だったことが判明しました。同様に京都国立博物館蔵「金剛般若集驗記 巻中」と静嘉堂蔵「金剛般若集驗記 巻中」はテキストが連続する関係にあることが判明し、前者第二紙の左端（後方）に継目跡、後者の右端（前方）に継目跡が確認できることから、元来、両者は連続して貼り継がれていた二紙による「接続」関係にあったことが明らかになりました。かつて貼り継がれていた二紙による「接続」関係にあったと思われる同様の例に、奈良国立博物館蔵「妙法蓮華経 巻第四残巻」と静嘉堂蔵「妙法蓮華経 巻第四」が該当することも判明しました。後者第七紙の直後に前者第一紙が連続することが経文からわかり、その仕様や料紙装飾、経文の書体から同一の経巻であると判断され、かつては貼り継がれていた「接続」関係、おそらく両者の間にはほぼ欠失はないものと判断されました。

本紙同士が「接続」する関係ではないが、かつては同一巻であった例に、京都国立博物館蔵「註楞伽経 巻第一」（重要文化財）と静嘉堂蔵「註楞伽経 巻第一」が該当しました。それぞれの仕様等から両者は同一の経巻であると評価でき、経文の確認から前者の第十九紙と第二十紙の間に後者が位置づけられますが、本紙は直接的に連続する「接続」関係にはないこと（京博本と静嘉堂本の間には欠失があること）が確認されました。また、京博本「註楞伽経 巻第一」にはその伝来を示す巻末識語が伝存しており、かつて「註楞伽経 巻第一」は大養

寺（東京都港区）に所蔵され、明治時代に清国の外交官である黎庶昌の所有となり、折帖に改装されたことが記録されていました。京博本「註楞伽經 卷第一」（現状は卷子装）には折帖であった頃の痕跡と思しきものも確認でき、その伝来と改装の歴史を留めていることも確認されました。その他、本調査研究の主な研究成果は以下の一覧にまとめました。

表 1. 主な調査成果一覧

三菱財団人文科学研究助成 「現存古写経の書写と伝来―静嘉堂古写経群を中心に」 主な調査成果一覧

静嘉堂所蔵	京都国立博物館所蔵	調査成果
13-3「宝網経」	「仏説宝網経」	静嘉堂第2紙のあとに京博第1紙が接続（つきあわせ）。虫食痕の間隔に矛盾なし。
12-1-107「金剛般若集験記 巻中」	「金剛般若集験記 巻中」	京博第2紙のあとに静嘉堂断簡が接続（貼り継ぎ）。虫食痕の間隔に矛盾なし。静嘉堂断簡の右端に糊痕、京博第2紙の左端にはがしとり痕（縦目痕）あり。
12-2-308 「根本説一切有部毘奈耶 卷第三二」	「根本説一切有部毘奈耶 卷第三二」	もと同一巻。「中聖武」。
13-4「註楞伽經 卷第一」	「註楞伽經 卷第一」	京博第19紙と20紙の間に静嘉堂の断簡が入る。静嘉堂第2紙のあとに京博第20紙が続く。1紙21行であり、静嘉堂第2紙が2行、京博第20紙が18行であるため、両者の間に1行分の欠があることを確認。
13-17 「摩訶般若波羅蜜經 卷第三六（紫紙金字経）」	「摩訶般若波羅蜜經 卷第二十」 「摩訶般若波羅蜜經 卷第三十九」	もと倭巻。
静嘉堂所蔵	奈良国立博物館所蔵	調査成果
19「妙法蓮華經 卷第四」	「法華經 卷第四残巻」	奈良博第1紙の前に静嘉堂第1～7紙、奈良博第5紙の後に欠失があり、その後に静嘉堂第8～11紙が続く。静嘉堂第7紙と奈良博第1紙が接続（貼り継ぎ）。静嘉堂第7紙・奈良博第1紙はともに27行。
静嘉堂所蔵	斯道文庫所蔵	調査成果
12-2-203「開皇三宝録 卷第八」	「大唐内典録断簡」	もと同一巻。
静嘉堂所蔵	大和文華館所蔵	調査成果
24「金光明最勝王經（讃岐切）」	「経巻切」	もと倭巻。

今後の展望および課題

古写経は長い歴史の中で切断され、分かれ、各地に分蔵されています。本研究では、古写経の経文の確認と実物調査を通して、静嘉堂所蔵古写経群と「接続」関係にある古写経などを明らかにし、実際にそれらがどのように「接続」していたのか、経文や写経に残された痕跡から検証しました。古写経をもとの姿に復元する研究といえ、今回の研究成果は然るべき論文で発表する予定です。

本研究は「大蔵経 DB」を援用し、古写経の経文が経典原文のどの部分に該当するか比定することから始まります。現存している経文が原文のどの範囲にあたるのか確認する作業です。今後、経典全体に対し現存している経文がどの程度残っているのか、そのことが古写経の基本データとして公開されるようになれば、各地に点在している古写経の「接続」関係などがさらに明らかになると思います。そこから古写経の新たな研究領域が広がることが想定されることから、今後、この調査手法の普及にも努めていきたいと思っています。

これからは古写経の伝来についても情報収集を進め検討していきたいと思っています。このたびの調査でも古写経の巻末識語や付属資料などに伝来の過程を示す情報が確認されました。今後も継続して伝来に関する資料・情報を博搜し、伝来の過程で改装された痕跡を確認しつつ、伝来等に関連する人物や歴史的背景を他の歴史資料と合わせて総合的に検証していきたいと思っています。そこから各時代における古写経の受容や評価について考えていきたいと思っています。

(完)

発表論文

- 1) 市川理恵・吉田恵理「静嘉堂所蔵「仏説中心経」と民屯麻呂の筆跡」（『静嘉堂研究紀要』3号、2025年3月）
- 2) 吉田恵理「〈資料紹介〉静嘉堂所蔵『目録』（松浦武四郎旧蔵品）について（その1）」（『静嘉堂研究紀要』4号、2026年3月）